

土曜の夜は僕のために

プロローグ

椎名は、新しい獲物を求めて、その日も、雑踏の街をうろついていた。午後の空は暗く重く、街を行き交う人々の群れも、どこかささくれた空気を発散しているようだった。ゴミタメの街・・・そんな言葉がびったりだ。椎名は、自虐的に自分の生まれ育った街の薄汚い素顔を見ている。

日の長い季節の土曜の午後である。もう歩き始めて二時間ぐらいいもたつだろうか。椎名は疲労を感じて、どこかで一息入れようかと考えた。蒸し暑い、エアコンの効いている喫茶店にでも入ろうか。

これまで何人もの少年達を、フレームに納め、一夜の寝床を共にした。カメラの前で少年を抱くことが、職業のようになっていた。かつての男達の欲望の供物が、今は供物を狩る側になっている。特定の少年と長く続いたことは今までなかった。それは当然のことである。ほとんどの少年とは「商品」として出会うのだから。名前も知らずに別れることさえ多かった。

「とりあえず、あそこを最後にするか」

たぶん一度も入ったことのないゲームセンター。ガラス張りで店内は暗い。派手なプラスチックの電光看板は、誰がやったかひび割れただけだった。

間口の広い自動ドアをくぐるとエアコンの冷気が頬をなで、電子音が聴覚を満たす。背広のサラリーマン。派手に髪をくくった大学生のグループ。制服のはだけた胸から、原色のシャツをのぞかせる高校生。次々に視線を走らせる。以前もこんな店で、○学生に声をかけたつけ。小遣い銭でお手軽に裸になる○学生。そんなに特別じゃない。でも、普通でもない。何かが狂っていて、何かしら不幸を抱えている。事情は人それぞれ。深く立ち入ったこともない。それに、今の時代に普通なんて、かえってどこか変なんじゃないのか。いつもそう思う。椎名はため息をついて考えるのをやめ、再び獲物を探し始める。

最初に気がつかなかったのは、彼が獲物の圏外だったからに違いない。この場所にあまりふさわしくないほどに小さな少年が、すぐ前のテーブルで格闘ゲームに興じている高校生の後ろにかじりついていて。半ズボンが似合いそうな年頃だ。足下から見上げていく。薄汚れたスニーカー、煤けたジーンズ。洗い晒されたTシャツに身を包んでいる。手首を見ると年齢がわかる。若々しいというよりは幼げ、細いけれどもふっくらとした線を持つ手首、節くれ立っていない太い指。顔を見る。柔らかな頬の輪郭、眉にかかるやや伸びすぎた髪、不思議な瞳。椎名は、視線が合わないように注意しながらも、その瞳に引き込まれていた。少年らしい好奇に満ちていながら、不思議な憂いを秘めた瞳、幼さとアンバランスな謎をたたえた瞳に、心惹かれた。

高校生が不本意なゲームオーバーになって、ディスプレイを一発叩いて立ち上がった。少年の目の前は空席になったが、彼は席に座る気配がない。椎名は「下心」をどこかに置き忘れたまま、それでも少年に声をかけた。

「僕、やらへんのか？」

ちよつと驚いた様子で、少年は自分に声をかけた見知らぬ青年を見上げた。すらりとしたスマートな体軀を、しゃれたジャケットで包んでいる青年を見て、彼は無愛想に答える。

「やらへん」

「何でや、せつかく腕前見せてもらおうと思たのに」

もはや本能となった親しげな態度で、椎名は笑いかける。

「お金あらへんねもん」

うつむいた少年の憂わしげな視線に、椎名は柄にもなくときめいた。しかし、すぐに、彼は破顔して、少年に笑いかける。

「そうか。軍資金つきたんやな。よかつたら俺と対戦せえへんか」

「そやけど・・・」

「俺がお金持ったるがな」

少年は椎名をじつと見る。椎名は胸の高鳴りを抑えた。ガキ一人になんでこんなに動揺する？

「俺は金持ちやさかい、気にすることないで」

「金持ち」は冗談めかしたセリフである。少年は初めてにっこり笑って、丸イスにさっと腰掛けた。椎名は向かいに座る。ゲームが始まり、少年は真剣な眼差しでディスプレイを見つめる。椎名は少年の顔を見つめていて、いきなり痛撃を食らった。

「おっと」

慌ててゲーム画面に視線を戻す。この少年はやたらうまい。この手のゲームは、小学生と言えども大人と大差ない。大人と子どもが真剣勝負をできるところが、ミソである。対等に遊ぶところから、子どもの心に入り込むきっかけをつかむのだ。ゲームもマンガも、少年の心をつかむための大切な小道具である。椎名は手慣れたものだった。普段は手加減をして盛り上げるのだが、この少年は強敵だった。

「そやけど、僕、なんでゲーセンなんか来るんや。このゲームやったら・・・」

遜色のないできのものがゲーム機で発売されている。

「僕のうち、ないねもん」

その上いっつもゲームをやっていた友人とケンカして、遊びに行けなくなったらしい。ゲームセンターに来て、ゲームをやる小遣いすらないという。指をくわえて人のプレイを見ているだけだったようだ。

「ふうん」

接戦に決着。敗れた少年は真剣に悔しがっている。椎名はようやく余裕が出てきた。このガキはもう一回やりたくてしょうがないはずだ。

「どや、俺、強いやろ」

「……」

「何やその顔、納得行っていないみたいやな。もう一回やるか」
少年の顔に笑みが広がる。素直な反応だ。

「そやけど、残念やな。今日は時間がないんや」

少年の表情が落胆に沈む。少年の心を掌中でもてあそぶ快感だ。

「どや、明日でも俺んとこ遊びに来えへんか。ゲーム機全部揃てるで」

もうこいつはいける。椎名は確信すると、ジャケットの内ポケットからメモ帳を取り出す。鉛筆で数字を並べると、「椎名」と署名し、ページをちぎり取った。

「俺の電話番号や。明日昼にでも電話してこいや。どうせ近所やろ？ 迎えに行つたる」

「ええのん？」

見上げる視線は不安と戸惑いをたたえて相変わらず魅力的だった。

「かまへんで。このケイタイに電話してき」

優しいな笑みを浮かべて、椎名は答える。残酷な思念が、そぞろ彼の脳裏を満たす。この可愛らしく幼げな少年の運命を俺がねじ曲げてやるのだ。久しぶりに、心が沸き立つ予感がする。

「そや、名前は？」

「アキラ」

アキラ……か。これも何かの運命の悪戯か。椎名はアキラの頭をさっと撫で、ゲームセンターを後にした。

#1 誘導

カーテンを閉め切ったマンションの一室。タイマーに起動されたエアコンが冷気を吐いていなければ、うだる猛暑が椎名を襲ったことだろう。十一時を過ぎてても、彼は寢床から出なかつた。寢室は怠惰な空気に満たされている。

半ば目覚めていた椎名を驚かせたのは、ケイタイの着信メロディである。サイドテーブルに手を伸ばして、チープな電話機を手に取ると、受話ボタンを押した。

「もしもし？」

耳慣れないかすれた声変わり前の声。椎名の判断力はまだ働かない。

「あのお、椎名さんですか」

「・・・お、そうだけど」

無愛想なしわがれ声で彼は答えた。

「アキラです」

「うん・・・お、アキラ君か」

「あのお、本当に遊びに行ってもいいですか？」

椎名の脳がアイドリングを終えて働き出すと同時に、会心の笑みが口元からこぼれた。

「何や、えらいかしこまっとるやないか。もちろんかまへんで・・・そしたらな、××駅まで出てこれるか・・・お、

そうや。前にマクドがあるやろ、わかるか・・・お、そうや。そこで待ってたら迎えに行つた。一時か、昼飯食うてくんのやな。わかつたで」

電話を切った椎名は、ベッドから飛び起きて軽いガッツポーズを一人で演じた。

身支度を整えながら、彼はうきうきとした気分で、様々に思いをめぐらしていた。

（今までで一番若いターゲット）

（性知識も、経験もたぶんまつさら）

（俺の思いのままの少年に「教育」する楽しみ）

（あてがいぶちじゃない、俺の開拓する出会いと体験）

彼は今のテレビの前に陣取り、ゲーム機を広げた。四台のゲーム機と無数のゲームソフトは、少年を取り込む誘導餌である。切替器と大画面テレビの接続をする。この居間が少年を開発する舞台となる。

彼は準備を整えると、ポーチ一つを手にして、マンションを後にした。

軽く昼食を済ませて、なるべく時間びつたり待ち合わせ場所に向かう。とは言え、この街の車の量はすさまじく、相当の余裕は見ておく必要があった。流行りのポプスをBGMに、十分ほど車を走らせると、目的地は目の前だった。

ハンバーガーショップの自動ドアの脇に、アキラを見つけた。昨日と同じ煤けたズボンと靴に、明るい黄色のTシャツを着ていたが、やはり襟元はくたびれていた。眩しそうな目をしている。椎名は車を降りて、横断歩道を渡る。アキラはまだ気づかない。

椎名はアキラの視界を避けて、横から近づき、彼の斜め後ろに立つと、唐突に声を掛けた。「アキラ君!」。アキラははじかれたように後ろを振り向いた。椎名の姿を認めると、満面に笑みを浮かべた。

「ああ、びっくりした。おじちゃんやったんか」

「おじちゃんとかやう。お兄ちゃんや。俺はまだ二十代やど」

「どつちでもええやん。車は?」

「向かいに止めてるわ、行こか」

椎名はアキラの半袖から出た健康そうな腕をさりげなくつかみ、柔らかな感触を味わった。助手席にアキラを乗せると、彼は小さな体をシートに投げ出して、開口一番、

「涼しい!」

と言った。素直な感情表現とこの愛嬌は、やはり中学生とはまたひと味違う、と椎名は思った。人差し指でほつべたをちよつと突いてやると、はしゃいで腕にかじりついてくる。椎名の心がうねる。この可愛らしくて幼げな少年に、自分が何をしようとしているのか考えると、悪意のうずきを抑えきれない。ハンドルを握る手に、少し汗がにじむ。

「そういうたら、まだ聞いてなかったな。アキラ、何年生や」

「〇年生」

「〇年生いうたら、×歳か」

「うん、まだ●歳のやつもぎょうさんおるけどな」

彼の通っている学校は椎名の行動範囲だった。一学年九クラスだかの超マンモス校だ。堀に囲まれて中身の見えない刑務所のような学校である。〇年生か・・・性への関心も体の変化も、まだ全てがこれからだ。この子をものにしたい・・・椎名は思った。

「アキラって、どんな字書くんや」

「うんとね、リョウって読む字、京都の『京』の上の方に・・・」

人差し指でしきりに空中に線を書くアキラを見ながら、椎名は手を打った。

「わかった、ナベブタ書いてカタカナの『ル』やな」

「それや」

『亮』はうれしそうに言う。

「実はな、亮の一挙手一投足を横目に見ながら、少年との距離を縮める会話を、順調に進めていく。

「俺の名前もアキラやねん」

「へえ!?」

亮は驚いたように椎名の横顔を見つめる。椎名はまたどきりとする。

「どんな字？」

「水晶の晶って書いて、アキラって読むねん。珍しいやろ」

「へえ、なんかきれいやけど、女の子みたいやな」

「ははは。そういわれたら、そやな」

同じことを言われたのは何回目だろうか。椎名はハンドルを切った。

「そやからな、何かアキラって呼びにくかったん。自分と同じ名前やからな」

「うん」

「これからリヨウって呼んでええか」

「リヨウか・・・うん。ええよ。そしたらお兄ちゃんはシヨウ兄ちゃんやね」

「それ、ええな。ほな、これからそれで行く。リヨウ」

「うん。シヨウ兄ちゃん」

二人だけで共有する約束事である。リヨウははしやいでいた。

「ごっついとこに住んでるねんなあ」

リヨウが高層マンションを見上げて言うので、椎名は吹き出してしまった。

「ははは、そら、この建物全部俺の家やつたらすごいけどな」

八階の部屋までエレベーターで上がる。椎名はさりげなくリヨウの肩を抱く。

没個性な鉄扉に、せめてもの抵抗か、木製の札にローマ字で名前を書いた表札などをあげている家もあるが、椎名の部屋には番号表示以外何もない。

「ええとこに住んでるなあ。シヨウ兄ちゃん一人で住んでるの」

玄関を上がつたリヨウは興奮気味に言う。

「独りぼっちや。そんないい部屋でもないで」

ガラスのテーブルから食器棚まで、通信販売でも手に入るたわいもない品ばかりだ。だがそれは大人の感覚である。

「うち、三人で住んでるけどここより狭いで」

「そうか。俺も子どもの頃はそうやったけどな」

生活レベルは、服装や会話の端々からだいたい見当はついている。狭いボロアパートで肩を寄せあつて暮らしているのだろう。あまり思い出したくない自分の過去の幻像を椎名はふと見た気がした。

「すごいなあ。全部あるやん」

リヨウは羨望の眼差しでテレビの前の設備を見る。

「僕の友達んところでも全部持つてるやつはおらへんで」

「驚くんはまだ早いで」

椎名は奥の部屋からカラーボックスを抱えて出てくる。ゲームソフトの山である。

「すごい・・・」

「好きなんやつとり。俺ちよつとジュースいれるからな」

ダイニングに行き、冷蔵庫を開ける。リヨウは宝の山をあさるように、カラーボックスをかき回している。しばらくして戻つて来ても、三つ四つのソフトを手元に並べて、まだゲームを始めていなかった。

「ジュース持つてきたで。なんやまだやつてへんのかいな。とりあえずジュース飲んだら対戦の続きや。それまで一人できるやつやつとき」

ジュースをお盆に乗せて置くと、椎名はリヨウに体をよせて座り込む。ストローからオレンジジュースを吸い上げる。

「これ、何か喫茶店のジュースみたいや」

「そやろ。俺の特製やで」

無果汁シロップにフレッシュオレンジを搾る。大人の舌には百パーセントオレンジの方がうまいのだろうが、×学生にはこのぐらいの甘さがちょうどいい。

「さあ、昨日の続きやろか」

「今度は負けへんで」

格闘ゲームの派手なBGMが鳴り響く。音響には気をつかっている。一般の家庭ではこんな音響を出せるシステムはまずない。しかし、音響が心理に及ぼす影響は大きい。感性の鋭い人間なら、ドラッグと煙草の違いぐらいはあるものだ。×学生を陶酔状態に導くには欠かせない道具の一つである。

最初の勝負はリヨウの勝ちだった。わざと負ける気はなかったが、リヨウの気合いが違った。この真剣な眼差し。いわゆる「ゲーム」に夢中になれる性質は、男の特性である。RPGの架空世界にはまれる人間は大人も子どもも男性が多い。こうし

た心情を総称して、「少年の心」などと表現したりする。リョウもまた、少年の心の持ち主だった。

一進一退の勝負をくり返し、あつと言う間に一時間は過ぎた。椎名はリョウに意識的にびったりとくっついて、勝負がつくたびにリョウの頭をこぶいたり肩を抱いたりする。リョウもそのうち遠慮がなくなってきた。椎名の腕をつねったりくすぐりを入れたりするようになってきた。手なずけるプロセスをゆつくりと楽しむ。

格闘ゲームに一段落をつけると、椎名は麦茶を取りに冷蔵庫に向かう。涼しげに水滴をつけたグラスを持ってリビングに戻ってくる。後ろからリョウに声をかけた。

「お前、ジーパンなんか履いとつたらきつないか」

そういう椎名は、楽な短パンに履き替えていた。

「そういわれたらそやけど」

「脱いでまえや、ちよつとごつついけど俺の短パンあるで」

「そやな」

この程度のことには羞恥心があるほどの年齢ではない。ただ、他人の家であるという警戒感と緊張感がどの程度残っているかということだ。友人の家でも、親がいればズボンには脱ぐまい。さつさとズボンを脱いでしまったところを見ると、かなりガードは下がっていると見えていい。椎名はそう計算していた。

トランクス一枚になったリョウは、椎名の出してきた短パンに足を通した。

「ぶかぶかやん。ええわ、誰もお客さん来いへんにやる」

リョウは短パンを投げ出して、パンツ一つで絨毯に座り込んだ。椎名にとっては、願ったりかなったりである。

椎名は、次はあまりアクシジョン性のないものをやりたかったので、そういう風に誘導した。ジャンル不詳の、クイズと双六を合体したようなゲームがある。二人でそれをやることに決めた。いろいろしゃべりながら、ゆつくりとスキンシップを楽しむ。

クイズのジャンルがアニメやマンガなら、リョウの方に分がある。しかし、「歴史」となれば大人の定番である。リョウはしきりに感心する。

「シヨウ兄ちゃん物知りやなあ」

「何ぼいうてもこれでも大人やで」

共同戦線で少しずつステージを進めていく。テレビ画面に夢中になっているリョウの横顔を見ながら、背中に腕をまわし、尻や太股や下腹部に、慌てることなく指を這わせていく。時折、リョウが自分の横顔をちらちら見ることに、椎名は気づく。ごく深刻な眼差しで、目線は合わせないように気を使う。二人を取り巻く雰囲気が変わり、沈黙が勝ち始める。

パンツの上から、そつと陰部に手を当て、様子をうかがう。ここから、勝負所である。その子によつて、反応は違う。体

による拒絶、言葉による拒絶、消極的な受容、積極的な受容、それらの中でも様態は様々。どういう反応をしても、それなりの対応をするのが「玄人」である。玄人なら無理はしない。どんなやり方をしても激しい拒絶しか返さない男の子もいる。それならそれで、あきらめるときはさうさとあきらめる。時と場合によっては脅して押す。ただし、今回は「合意」を得られなければ潔く撤退するつもりだった。今椎名は、わずか数時間で「いける」という感触を得て、行動に出ているのである。

リヨウは、何事もなかったようにゲームを続けている。自分の下腹部を見ようとはせず、ゲーム画面を注視している。椎名は、より大胆に指を動かし、ペニスの感触を確かめ、揉みはじめた。小さなペニス。亀頭の未だ未成熟なペニス。もちろん皮をかぶったままのペニス。ほんの少しの時間で、俺がこの年の頃はどようだったっけ、と考えた。

たぶんいけるだろう。椎名は決断して、柔らかい腹の肉の下、パンツのゴムに手をかけて、五本の指を滑り込ませた。もちろん無毛の、すべすべの陰部、ねっとりとした感触のペニス。くすぐるように、すばんだ先端に触れる。お互いに、ゲームをやる手は止まっているのに、リヨウの目は相変わらずテレビに釘付けのまま。陰部を意識していないはずはないに。

親指と人差し指を巧みに使って、弾力を持った小さなペニスをもてあそぶ。もはや椎名の体はリヨウの背中に回って、胸を密着させ、一方の手もむきだしの太股をさすっている。リヨウの唇はきつと結ばれている。ペニスの先はじつとりと湿ってきたように感じられる。

「オナニーって知ってるか」

椎名はリヨウの耳元でささやいた。

「・・・わからへん」

聞き取れないぐらいの小さな声でリヨウは答える。

「気持ちええか」

「・・・わからへん」

リヨウはかっと目を見開き、厳しく口元を閉じているが、やや息は荒くなり、顔は紅潮しているように見える。

「脱がすぞ」

ペニスを握っていた手で、トランクスを止める間もなくさっと下げる。一瞬抵抗しようとしたかに見えた右手を、リヨウはすつと引つ込めた。陰部が露わになり、かわいらしいペニスがびよこんと隆起しているのを椎名は見つめた。

椎名はリヨウの両脇に手をあてがいがい、彼の体を自分の膝の上に運んで座らせた。温かいむき出しの尻の感触を触れて味わう。Tシャツと靴下だけで男の膝の上でなすがままになっっている小さな体は、幼げなエロスを十二分に発揮していた。椎名の股間は限界近くまで怒張っていた。固くなったペニスが、リヨウの尻の谷間に接触している。

手慣れてしまった椎名にとっても、久々に感じるほどの性的な嵩ぶりだった。たまらない幸福感だ。無垢のものを手に掛け

ることが、これほどのエクスタシーをもたらすものなのか。片方の手をシャツの中に滑り込ませ、腹部や胸の曲線を楽しみ、乳首に指を這わせた。一方の手は執拗にペニスをもてあそんだ。精通のすんだ体では、こう長くは楽しめない。リョウも、ペニスだけは感じているはずだった。それだけは確かだろう。すでに射精のできる体になって久しい椎名には、もちろん二度と味わえぬ、思い出すことも難しい、独特の快感を。リョウは口を半開きにして、激しい息をもらし、目は涙ぐんでいるようだった。体の力を抜き、全身を椎名に預けていた。

数十分とも思える長い愛撫の末に、ようやく小さな「あ・・・」というようなあえぎを、リョウはもらした。○年生なりに、イッたのか・・・椎名はそう感じた。呼応するように、リョウの小さなペニスの、弾力が弱まっていくように感じられた。